

戦時の博物館廻り

形勢は急轉直下して大戦の幕は切つて落され戦戦の聲で都の街は煮えくり返つた、遊子一生の思ひ出には斯る光景も必ずしも興趣を惹かぬではなかつたが、この事件の突發したが爲に自分の主要の目的を達する上には少からぬ影響をうけ暫らくはこゝにブラブラすることを餘儀なくされることになつた、そこで旅程の上からは最後にまはしてあつた博物館廻りを最初に繰り更へて、劍戟の光り凄まじい光景を外に所在の博物館の中に姿を没することにとりきめた。

アレキサンダー三世博物館

ネブスキー大通りから一町ばかり引き込んだミハエル廣場を前にして、白堊の色も清いトスカナ風の宏壯な一構への建築がある、これが此の度露西亞皇帝の御名代として遙々我が皇室を訪問せられ、けふしも御歸國の途すがら我が京都に立ち寄せらるゝゲオルギ、ミハエロウイッチ太公殿下の館長として主宰せらるゝアレキサンダー三世博物館である、此建築はもとミハエル、パウロウイッチ太公殿下の爲めに一八一九年から一八二五年に亘つて建てられたものであるが、後一八九五年から九八年にかけて修補して博物館として用ゐらるゝことになつたものである。